

## 『無礙解道註』(*Saddhammappakāsinī*) の 源泉資料について

林 隆 嗣

上座部大寺派の現存パーリ註釈文献(パーリ・アッタカター)には、底本となった古註釈(シーハラ・アッタカター)が存在したと伝えられているが、ブッダゴーサは *Visuddhimagga* (*Vism*) において *Paṭisambhidāmagga* (*Paṭis*) を引用し解説する際に *Paṭis* の古註釈(“*Sīhala-Paṭis-aṭṭhakathā*” = *S-Paṭis-a*) には言及していない。一方、*Paṭis* の現存パーリ註釈である *Saddhammappakāsinī* (*Paṭis-a*) においても古註釈の使用状況ははっきりしない。著者マハーナーマはブッダゴーサよりも後代の人物であり、マハーナーマの時代にはすでにブッダゴーサの *Vism* とその他のパーリ・アッタカターは大寺派の教団に普及していたはずである。そのような状況でも、マハーナーマはあえて古註釈に遡り、それを中心資料(底本)として *Paṭis-a* を編纂したのか。また、そもそも *S-Paṭis-a* は存在していたのか。これらの疑問を解明することは、*Paṭis-a* の制作状況やブッダゴーサの註釈手法を浮き彫りにするだけでなく、文献成立史的、思想史的な新古層を見極める上でも重要な課題であるが、*Paṭis-a* の古註釈についてこれまで不在の指摘<sup>1)</sup> はあっても十分な検証は行われないままであった。本稿では、パーリ註釈文献の源泉資料に関する先行研究(森祖道『パーリ仏教註釈文献の研究』山喜房仏書林、1984)を踏まえたうえで、*Paṭis-a* の源泉資料を検討してみたい。

序文(*Paṭis-a* i.2)と跋文(*Paṭis-a* iii.703)とには、*Paṭis-a* の執筆に際して“*Pubbo-padesaṭṭhakathā(-naya)*”, “*Pubbaṭṭhakathā(-naya)*” に依拠したことが記されているが、森 1984: 204–206(後者には言及せず)の指摘の通り、これらは特定の資料名ではなく、先行する註釈一般を意味する総称にすぎない。そのため、これらを *S-Paṭis-a* の痕跡とみなすわけにはいかない<sup>2)</sup>。

では、特定の名称を伴わない単数形の“*Aṭṭhakathā*”の場合はどうだろう。パーリ註釈に引用される単数形“*Aṭṭhakathā*”は、これまで原則的には「パーリ・アッタカターの中心的底本としてのそれぞれの古註釈」と考えられてきた。そうであれば、*Paṭis-a* 内の単数形“*Aṭṭhakathā*”を *S-Paṭis-a* とみなしてもよいのだろうか<sup>3)</sup>。

ただし、森祖道自身、それらの中にはパーリ註釈書間での引用や転借や書き換えがあることを認め、すべて底本的古註釈と判断するのは早計であると述べている(森1984: 220)。そこで、まずは Paṭis-a 内の単数形 “Aṭṭhakathā” の12例を考察してみよう。

## 1. 『無礙解道註』における単数形 “Aṭṭhakathā”

① Paṭis-a i.68 は “Aṭṭhakathā” からの引用箇所のみならず、前後も含めてウパセーナの *Niddesa* 註 (Nd-a) i.44 に同一文章が存在する(森1984: 218)。両書の完成年について、森1984: 549–553, 554–558 は、Nd-a を436年、Paṭis-a を514年の成立とみなす。Nd-a よりも後に Paṭis-a が成立していたとすれば、Paṭis-a におけるこの “Aṭṭhakathā” の引用は Nd-a からの転載にすぎない。ところが、もしも Nd-a の方が Paṭis-a よりも後であれば、Paṭis-a のソースが問題となる。実際、von Hinüber 1996/1997, §§ 287, 291 は、それぞれの成立年代を Paṭis-a 559/499年、Nd-a 877/817年と考える。その場合、源泉資料を推定するヒントは前後の文脈にある。ここで「欲界・色界・無色界」の三界を註釈する “Aṭṭhakathā” の直前の文章は、明らかに聖典アビダンマの *Vibhaṅga* (Vibh 421) と *Dhammasaṅgaṇi* (Dhs 223–224) による三界の定義文である<sup>4)</sup>。一方、“Aṭṭhakathā” の引用箇所と同じ文は存在しないが、内容的に一致するもの(三有と蘊との関係)は、Vism xvii.255, Vibh-a 184 における縁起支の議論中に存在している。この Vibh-a 184 は Vibh 421 を註釈する箇所ではない。しかし、Paṭis-a において、Vibh からの引用直後に「一方、アッタカターでは」とつながる流れを考慮すると、この “Aṭṭhakathā” は Vibh-a の内容を指すと考えてもおかしくない。しかも、さらにこの後に続く10行分が、再び Vibh 86–87 の引用という状況があることから、この議論全体が Vibh と深く関連することは確かである。

② Paṭis-a i 138 における “Aṭṭhakathā” の引用は、*Dīghanikāya* (DN) の註釈 *Su-māṅgalavilāsinī* (Sv) iii.1052 に一致する。ここで Saṅgītisutta を引用した直後に、その語句の解釈として “Aṭṭhakathā” を引用しているため、ブッダゴースのパーリ註釈を指すことは明らかである。

③④ Paṭis-a i.331–332 に連続して現れる事例は同じ “Aṭṭhakathā” を指す。引用内容は samaya の語義解釈に関する有名な偈で、Paṭis-a に先行する四部註およびその他の經典の註釈では、經典冒頭の “evaṃ me sutam ekaṃ samayam” を逐一説明するために使用されている (Sv 1.31, Ps i.7, Spk i.9, Mp i.11, Khp-a 104, Sp i.107, As 57; cf.

Ud-a 19, Bv-a 128 および Paṭis-a iii.530)<sup>5)</sup>。そのため、この“*Aṭṭhakathā*”は、これらの先行パーリ註釈を不特定に指したものと考えられる。

⑤ Paṭis-a ii.354 の事例は、森 1984: 218 の指摘通り、Vism xiii.10 に同一文が存在するのみならず、前後も含めて広範囲に一致することから、この箇所は明らかに Vism からの転載(孫引き)である。もともと Vism では DN i.79 における他心智の説明を引用した上での解説なので、“*Aṭṭhakathā*”はむしろ DN の古註釈と考えるべきだろう。

⑥ Paṭis-a ii.442 における“*Aṭṭhakathā*”の引用文は *Āṅguttaranikāya* (AN) の註釈 *Manorathapūraṇī* (Mp) ii.24–25 に存在する。しかも、この被註釈箇所 (Paṭis i.140) 自体が AN i.24 からの転載であり、それに対する註釈であることを考えると、この“*Aṭṭhakathā*”は当然パーリ註釈 Mp を指す。

⑦ Paṭis-a ii.523 における“*Aṭṭhakathā*”の引用文“*aniccatā ti . . . hutvā abhāvo cā*”は、同じ Paṭis-a に既出である (ii.503)。従って、Paṭis-a 自身を指すという可能性がまずは考えられるだろう。しかし、同一文献内で既述内容に言及する場合、“*hetṭhā (. . . ti) vuttam*”といった表現がより一般的である。他の註釈文献との関係をみると、この前述箇所 (Paṭis-a ii.503) は、Vism viii.234 と *Vinaya* (Vin) の註釈 *Samantapāsādikā* (Sp ii.434) と同一である (cf. Vism xxi.6, Vibh-a 50)。しかも、ここでは前後を含む数ページ (Paṭis-a ii.502–504) にわたって Vism viii.229–236 と Sp ii.433–435 に一致していることから、全体が転載であることが明白である。もともと Vism と Sp のこの箇所は Paṭis i.175–176 を引用した上での解説であり、さらに詳しく見ると、この Paṭis および Vism と Sp とは共通して Vin iii.70f., MN iii.82f., SN v.311f., AN v.111f. における安般念の説明文の引用とそれに対する解説とを全体のフレームとしている。Lottermoser は Vism と Paṭis-a との解説を比較し、Sp での重複箇所やニカーヤ註での記述なども含めて詳細に照合した。そして、Vism における安般念の解説のソースは Paṭis-a ではなく、Vin の古註釈や念処経に関わるニカーヤの古註釈であろうと結論づけた<sup>6)</sup>。このことを合わせて考えると、この事例は、先行する Vism や Sp という特定のパーリ・アッタカターを指すか、「聖典の記述に対して註釈(一般)では」という意味で普通名詞とみなすのが適切であろう。

⑧ 聖典 Paṭis i.195 に言及される厭惡止滅智が脱欲性智・省察随観智・行捨智の三智を含むと規定したあと<sup>7)</sup>、さらにこの智と道智・随順智との関係を議論する中で Paṭis-a ii.527 に“*Aṭṭhakathāyam pi ca phussanā ti appanā ti vuttam*”という一節

が存在する。phussanā/phusanā と appanā の二語が近接して語られるのは、Vism viii. 189, Sp 418<sup>8)</sup> および Paṭi-a ii.495<sup>9)</sup> の “**phusanā** ti phuṭṭhaṭṭhānaṃ. ṭhapanā ti **appanā**” (phusanā とは、[息が] 触れた場所であり、[心の] 設置とは、appanā である) という一か所だけである。これらは、安般念の「作意規定」(manasikāravidhi) の 8 項目<sup>10)</sup> 中の 2 項目であり、両者は全く別概念である。そのため、この箇所を「phusanā とは appanā である」と理解することはできない。解釈の鍵は、Vism 第 8 章中の一文 (Vism viii.204) に対する復註にある (Vism-mhṭ Ne i.599)。

so hi **pāḷiyam** “appanā byappanā” ti niddiṭṭho, taṃsampayogato vā yasmā jhānaṃ “appanā” ti **aṭṭhakathāvohāro**, jhānaṅgesu ca samādhī padhānaṃ, tasmā taṃ “appanā” ti dassento “avase-sajjhānaṅgapaṭimaṇḍitā appanāsāṅkhātā ṭhapanā ca sampajjati” (sampajjiti を修正) ti āha.

つまり、それ (vitakka) は、聖典では “appanā byappanā” と教示されている。また、それと関連しているから、禪定 (jhāna) が “appanā” というのはアッタカターの慣用語であり、諸禪支中の三昧が勤励 (padhāna) である。それゆえ、それを “appanā” として示して「そして (尋伺など) 残りの禪支を具した appanā(-samādhī) と称する ṭhapanā が起こる」と言った。

appanā の語は、元々聖典では尋の同義語として takko vitakko saṅkappo appanā... という定型的定義文に現れるだけだったが、註釈では禪定用語として使用される。そのため、appanā は「アッタカターの慣用語」と呼ばれている<sup>11)</sup>。同様に、phusanā も聖典では触の定義で phasso phusanā samphusanā... として出る場合と、iddhi (Vibh 217ff.) や upasampajja (Vibh 257ff.) という語に関して lābha, paṭilābha, patti, sampatti, phusanā... という同義語の定型句として出るだけである。それが註釈に至って禪定の特殊な術語として使用されるようになる。

このことから、この “Aṭṭhakathā” は、聖典に対する註釈 (普通名詞としてのアッタカター) を指していると理解するのが適切であろう。

⑨ Paṭi-a iii.578 の事例は、同一の文章が他文献に存在せず、被註釈語句も聖典 Paṭi のこの箇所にしか存在しないものである。しかも「顛倒論 Vipallāsakathā」(Paṭi ii.80-81) という章のなかで AN ii.52 の経典を全転載した後の独自の短い補足部分に対する註釈であって、AN の註釈 Mp iii.91 には上記に相当する文章も内容も見られないので、当然 AN のアッタカターでもない。そのため、この “Aṭṭhakathā” は Paṭi の古註釈と考えることができるかもしれない。しかし、ここで述べられている道智の各段階における四顛倒の捨断に関する見解は、Vism で確立されており、同一趣旨の内容が記されている<sup>12)</sup>。従って、この箇所は聖典に述べられていない註釈説、註釈特有の教義であることを示している可能性も考えられる。

⑩ Paṭis-a iii.648 では、智慧第一のサーリプッタを讃える偈が“*Aṭṭhakathā*”に帰せられている。ここでは、サーリプッタに言及する AN i.23 の一文を引用した直後に「そして、アッタカターでは」とつなぐ構成であるが、AN の註釈 Mp にはこの偈が存在しない。この箇所について、森 1984: 218 は MNd-a ii.300 との前後を含む長文の平行が存在することを指摘している。註釈文献の成立順序によってはウパセーナの Nd-a から転載した可能性も考えられるが、より重要なのは、この偈が Vism viii.21 に存在する事実である<sup>13)</sup>。従って、Nd-a の成立が Paṭis-a より後であっても、マハーナーマの時代にはこの偈の存在が Vism を通じて知られていたといえる。そのため、この偈の典拠を S-Paṭis-a とみなす必要はない。

⑪ Paṭis-a iii.657 の事例は、聖典 Paṭis の語句“*āvajjati*”と“*āvajjitvā nāṇena adhiṭṭhāti*”の解説であるが、Vism xii.59 に Paṭis の同一箇所からの引用直後に下線部と同じ文章があるのでこれを指していると考えられる(“*Aṭṭhakathā*”に基づくとは言わない)。ただし、Paṭis-a は、この直前(Ec で 12 行前)で“*Visuddhimagga*”という名に言及していることから、ここでの“*Aṭṭhakathā*”は“*Visuddhimagga*”とは別ではないかとも思われる。しかし、引用元は Vism ではあっても、聖典の *āvajjati* という語句に対する註釈箇所という意味、あるいは聖典段階ではなく註釈期に確立した解釈であることを示す普通名詞と理解することができよう。

⑫ Paṭis-a iii.689 での引用についても、Vism xxii.80 に同一の文章が存在する。Vism はここでも Paṭis ii.217-19 の本文を引用した直後にその内容解説をしており、しかも Vism ではそれを“*Aṭṭhakathā*”とは呼ばない。状況は⑪と同じである。

以上のように、Paṭis-a に単数形“*Aṭṭhakathā*”が現れる全 12 例のほとんどが先行パーリ註釈文献を指すか、古註釈を引用したパーリ註釈からの転載、または聖典の対概念と考えられる。一方、平行が見当たらない事例(①⑨の 2 例)については Paṭis の古註釈の可能性も残されているが、類似内容をもった先行パーリ註釈文献の書き換えと理解することも可能である。

## 2. 『清浄道論』と『無礙解道註』の関係

Paṭis-a には、⑨⑩⑪⑫の“*Aṭṭhakathā*”のように Vism に基づくと思われる箇所が存在する。Vism はしばしば Paṭis を引用し解説を加えるが、Paṭis-a がこの解説を利用する場合に古註釈 S-Paṭis-a との対照を推定させる議論があるかどうか調査してみよう。Paṭis-a が“*Visuddhimagga*”という名称を用いて言及している 12 箇所(森 1984: 98)のうちで、Vism が Paṭis を引用・解説するのは 4 箇所である。

Paṭis-a i.275 は Paṭis 68 の註釈において “vuttaṃ h’ etaṃ Visuddhimagge” と述べ、自説の根拠として Vism xxiii.10 を引用する<sup>14)</sup>。Paṭis-a iii.607 は「慈修習の分類は Vism から得るべし」と指示する (cf. Vism ix.1-76)。Paṭis-a iii.592 は、Vism xx.125 が引用する聖典 (Paṭis) の読みの微妙な相違を指摘し、Paṭis-a iii.665 では Vism v.28 と Vism xii.138 の異なる説明を比較している (S-Paṭis-a との比較ではなく!)。このように、マハーナーマは、ブッダゴーサによる解説を詳細に読み込み、分析して紹介しており、そこに S-Paṭis-a の見解を差し挟まない<sup>15)</sup>。

そもそも、Vism においても “Paṭisambhidā (magga)ṭṭhakathā” という明示的表現はない。では、Vism が “Aṭṭhakathā” を用いる中に S-Paṭis-a と考えられるものがあるだろうか。森 1984: 208 によると、Vism での単数形 “Aṭṭhakathā” は計 10 例 (ii.8, ii.12=ii.89, iii.96, vii.116, ix.85, xii.44, xiii.10, xiv.67, xiv.71) 存在する。そのうち、vii.116 は AN の古註釈 (cf. Mp ii.324)、ix.85 も AN の古註釈 (cf. Vism ix.82) と思われる。ii.8 は十三頭陀支の「時後不食」の語義解釈である。十三頭陀支は聖典のごく一部にしか見られず、しかもそれらの註釈で類似した説明は存在しない。一方、ii.12 には Mahā-aṭṭhakathā という注記もあり、MNd-a i.196 にパラレルがある。内容的に ii.12 と ii.89 は同じものである。古註釈 Mahā-aṭṭhakathā なのか、Nd の古註釈なのか不明だが、後者の可能性は低いだろう。iii.96 は聖典の対概念としての註釈一般を指す。vii.116, ix.85 は AN の古註釈。xiii.10 は⑤で検討したように、DN の古註釈である。xiv.67, xiv.71 はアビダンマの色法体系の議論であり、聖典では Dhs しか該当しないので、Dhs に関する古註釈と考えられる。

このなかで 1 例のみ、Vism xii.44 の “Aṭṭhakathā” の引用文が Paṭis-a iii.686<sup>16)</sup> に一致する。そもそもこの箇所は十神通の 1 つである「彼々処正加行縁成神通の義による神通」(Paṭis ii.213-214) の解釈であって、この名称も十神通の分類自体も Paṭis に特有で、Vism が示すこの “Aṭṭhakathā” は Paṭis の古註釈と考えるのが自然かもしれない。しかし、もしも聖典全体を註釈する Mahā-aṭṭhakathā のような古註釈が、十三頭陀 (ii.8, 特に ii.12) や十神通のような数で整理された特有の教義項目をもまとめて解釈しているなら、S-Paṭis-a を想定する必要がなくなる。

### 3. まとめ

本稿では、Paṭis-a の主要な源泉資料となるべき古註釈 S-Paṭis-a の存在を探るために単数形 “Aṭṭhakathā” を検討した結果、ほとんどが先行するブッダゴーサのパーリ註釈文献からの引用や転載であり、可能性を考慮しうる数例についても決定的



な証拠となりえないことが判明した。また、Vism との関係からも S-Paṭis-a の明確な痕跡は見出せなかった。

筆者は以前 Paṭis-a における固有名を伴った “-aṭṭhakathā” (Khandhakatṭhakathā, Saṃyuttaṭṭhakathā 等) がすべて現存パーリ註釈文献に基づくものであることを指摘した<sup>17)</sup>。紙面の都合上詳細は省略するが、その他、複数形 “Aṭṭhakathā” への言及箇所 2 例、シーハラ・ソースとなりうる人物的名称 “Porāṇa” の 16 例、“Aṭṭhakathācariyā” の 3 例、さらに “Digha-/Majjhima-/Saṃyutta-bhāṇakā” の事例についても、すべて先行パーリ註釈文献からの転借と考えられる<sup>18)</sup>。

こうした状況を総合すると、上座部では元から S-Paṭis-a が存在せず、マハーナーマは Paṭis を註釈するにあたって、古註釈を参照するよりも当時普及していたパーリ註釈を専ら利用していたと考えた方が理解しやすい。むしろ、マハーナーマの時代にはシーハラ・アッタカターが全体的に消滅していたのではないと思われるほど痕跡が見当たらない。この点については、さらにダンマパーラやウパセーナらの註釈文献を調査、検討することが必要となるだろう。

1) A. K. Warder, introduction to *The Path of Discrimination*, by Bhikkhu Ñāṇamoli (Oxford: PTS, 1982/1991), xlvii: cf. K. R. Norman, *Pāli Literature* (Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 1983), 132, Oskar von Hinüber, *A Handbook of Pāli Literature* (Berlin/New Delhi: Walter de Gruyter/Munshiram Manoharlal, 1996/1997), §295. 2) 森 1984: 205 は古註釈類一般を意味するものとみなし、「その中心は古い Pts のアッタカターである」とする。

3) 森 1984: 204 は「Aṭṭhakathā (単数形、即ち Pts の古註釈)」とする。4) Paṭis i.83-84 において kāmāvacarā bhūmi 等の語句について同じ定義が見られる。また欲界のみは Vibh 86 = Vism xv.27 にも定義文がある。5) この偈は古くから大寺派に伝わる “lexicon verse” と考えられる (von Hinüber 1996/1997, §293)。この “Aṭṭhakathā” がブッダゴーサ以前の古註釈に由来することを意図したとは思えず、マハーナーマが直接古註釈に遡って引用したとも考え難い。

6) Friedgard Lottermoser, *Quoted Verse Passages in the Works of Buddhaghosa: Contributions Towards the Study of the Lost Sīhaḷatṭhakathā Literature*, Göttingen (Thesis Göttingen 1979), 1982: 168-172, 197. 7) Vism では、1. 生滅随観智・2. 壊随観智・3. 畏怖現起智・4. 過患随観智・5. 厭惡随観智・6. 脱欲智・7. 省察随観智・8. 行捨智の 8 種の智と随順智が説かれており、なかでも「行捨智」については、Paṭis ii.64 を引用しつつ〈脱欲性・省察随観・行捨智〉の 3 つが含まれるとしている (Vism xxi.79, Porāṇa の説でもある)。

8) この直前で Visuddhimaggato gahetabbo と明記。9) この直前で Visuddhimagge vuttanayena と明記。10) 原型は『解説道論』(T32, 430b「先師」)に遡る。11) Vism-mhṭ i.189 でも、三昧の定義に関連して、vitakka の同義語である appanā が禪定の文脈で使われるのは aṭṭhakathāvohāra であると説かれている。

12) Vism xxii.68: anicce niccaṃ anattani attā ti ca saññācittatīṭṭhivipallāsā, dukkhe

sukhaṃ asubhe subhan ti dīṭṭhivipallāso cā ti ime paṭhamaññavajjhā; asubhe subhan ti saññācittavipallāsā tatiyaññavajjhā; dukkhe sukhan ti saññācittavipallāsā catutthaññavajjhā. 13)

『解脱道論』(T32, 432a)にも Vism のこの箇所に対応する議論があり、同じくサーリブッタに言及するが、偈はない。 14) Paṭis-a i.268 の再掲であるが、これは数ページに亘る Vism からの引用。

15) ⑪でも触れたように、Paṭis-a iii.657 では “Aṭṭhakathā” の直前で「Vism で述べられている 14, または 15 の仕方 (ākāra) で心が調御された……」とある。ところが、対応する Vism xii.3 では、14 の仕方のみ。しかも Vism xii.7 では後者は「ある人々 (eke)」の説とされ、それが “Aṭṭhakathā” (pl.) に述べられていないという理由で明確に却下されている。Aṭṭhasālini iii.388 でも 14 のみ。Paṭis-a では、この立場に従わず、keci の説としてあえて復活させている (Paṭis-a i.344, cf. iii.657)。しかし、ブッダゴーサの時代に現存した古註釈群が認めない「ある人々」の異説を唱える古註釈 S-Paṭis-a が 100 年後のマハーナーマの元に現れたとは考えがたい。 16) Paṭis-a の Ee や Ce ii.510 では “athāyaṃ” とあり、Be ii.302 と Se ii.445 は、Vism の記述に合わせて書き換えた可能性もあるが、“Aṭṭhakathāyaṃ” とある。

17) 拙稿「ヴィーナーの喩え (Viṇopama) とインド音楽理論—パーリ註釈文献の源泉資料に関連して—」『パーリ学仏教文化学』25, 2011: 7-9。

18) しかし、“aññe ācariyā” (i.226), “aññe” (i.276), “keci ācariyā” (i.233, 森 p.293) および “keci” (i.267, Gaṇṭhipada によるとアバヤギリ派。See Warder 1982/1991: lix.) についてはパラレルが見当たらない。“Peṭaka” (i.181) は Gaṇṭhipada によると化地部のもの (Warder 1982/1991: lix.) とされる。従って、マハーナーマは当時知られていた学説や資料を盛り込む努力を怠っていたわけではない。Cf. Ole Holten Pind, “Mahānāma on the Interpretation of Emptiness: A Study of Mahānāma’s Reference to Nāyagantha Saddagantha in Paṭis-a, with a Note on Nāgārjuna’s Concept of Negation,” 『パーリ学仏教文化学』5, 1992: 19-33.

Vism (HOS 版), Vism-mht (Pāli-Granthamālā 版), As (BOS 版) 以外のテキストは PTS 版を使用し、略号は *A Critical Pāli Dictionary* に従った。

〈キーワード〉 マハーナーマ, ブッダゴーサ, アッタカター, パーリ註釈文献

(こども教育宝仙大学教授)